

# 乳幼児教育

畠山 美桜      林 真菜実      門出 梨紗子

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

## 概要

現在、少子化や女性の社会進出に伴い、乳幼児教育や早期教育が注目を集めている。具体的には、モンテッソーリ教育やシュタイナー教育、ヨコミネ式教育等の教育法が挙げられ、早期に教育を開始することで脳の神経回路を増やして天才児を育てる事や絶対音感を身に付ける事が可能になるという成果が上げられている。このような能力は誰もが魅力的に感じるものであるが、その反面、能力を身に付けることだけに固執することにより子どもの精神的な負担や協調性・道徳心等の社会で生きていく上で大切となる社会性が欠如する等、様々な問題が生じていることも事実である。このような問題に対して、どのように対応していくかが今後の教育の課題であり、子ども達の健やかな成長にとって重要なことである。そこで、本研究では乳幼児教育が注目を集めている理由を明らかにすると同時に、表面上は利点のみを謳っている様々な教育法の裏側に存在する問題点について詳しく考察していくことにする。

## 1 章 乳幼児教育の概要

最近、乳幼児教育というものが注目を浴びている。その背景として、少子化や女性の社会進出が挙げられるが、私達はその背景や社会で行われている施策についてどれだけ知っているのだろうか。そこで、この章では乳幼児の発育段階について理解すると共に、日本と世界で具体的にされている教育方法について詳しく述べていくことにする。

### 1.1 節 乳児教育

乳児は話すことが出来ないが、乳児の脳細胞は母親の声や息遣いに反応していることはよく知られていることである。そのようにして2~3歳に成長する過程で言葉を使う時に働く神経回路ができつつある為、乳児を抱く時やおむつを換える時、または、授乳の時等は積極的に話しかけることが大切なのである。更に、胎内では低周波の音を聞いていた胎児であるが、生まれたばかりの新生児は高周波の音をよく聞きわけることが解ってきた。大人が乳児に話しかける時には誰もが自然に高い声になるが、これは乳児にとって最適なことなのである。また、乳児は声を出したり、目で追ったり、手をつかんだりして与えられた刺激に対しての理解を深め刺激に対して積極的に反応することで脳の発達が促されている。すなわち、1ヶ月~3ヶ月半頃の乳児はおもちゃの色や形の違いを理解していく為、握る事やつまむ事、また、それを離せるようになることが大切なのである。

平均的に2歳前後で発話が始まるが、言語の基礎として最も重要なことは、言葉を発する前の段階で話題の対象を相手と一緒に注視したり、指差しで対象を示す力が育まれていることである。こうした言語の基礎を育む為には、応答的に子どもと関わる必要がある。応答的とは、子どもの動作や声に対して言葉や視線、表情の変化、動作などで積極的に応え、新たな子どもの言葉や行動を促進する働きかけのことである。また、2歳前後は第一次反抗期の始まりでもある。この頃になると子どもは自我が芽生え徐々に自己主張が強くなる。しかし、自分の主張があっても言葉が未熟で上手く表現することができず、また、表現方法も分からない為癇癪を起すのである。子どもによってその度合いや時期に個人差はあるが、それにより子育てに壁を感じるという親も少なくないのである。しかし、第一次反抗期は子どもにとって大切な成長過程であり、親に

とつても子どもとの接し方や叱り方等を試行錯誤していく時期である。子どもが痙攣を起こした場合は、抱きしめる等して、まず子どもの気持ちを落ち着けることが必要である。そして、落ち着いてきたら子どもの気持ちを言葉にして受け止めることが大切である。勿論、子どもの主張をすべて受け入れるわけにはいかないのであるが、その時は初めからいけないと叱るのではなく、まずは子どもの気持ちを受け止めてから「なぜいけないのか」を子どもが納得できるように分かりやすく伝えることが必要なのである。

## 1.2 節 幼児教育

幼児教育とは、一般的には幼児に対する教育を意味しており、幼児が生活するすべての場において行われる教育を総称したものである。具体的には、幼稚園における教育、保育所等における教育、家庭における教育、地域社会における教育を含む広がりを持った概念として捉えることができる。しかしながら、小学校と同様に初歩的な教育として考える意見も多いが、従来から使われてきた「保育」こそが幼児に相応しく、小学校以上の「教育」とは一線を引くというような意見も存在している。そのような中、現在世界では幼児期からの算数教育、言語教育、音楽教育等、様々な幼児教育が行われている現状である。

幼児教育指導法の歴史的系譜を見てみると、主なものとしてコメニウス(1592-1670)の感覚的指導法、ルソー(1712-1788)の自然主義的指導法、ペスタロッチ(1746-1827)の直感的指導法、フレーベル(1787-1852)の遊びによる指導法、モンテッソーリ(1870-1952)の集中作業による指導法、倉橋惣三(1882-1955)の誘導保育論等が挙げられる。コメニウスは幼児期の教育を教育全体の中に位置付け、体系的な幼児教育論を初めて公刊した人物であり、コメニウスを中心として近代教育が本格的に論じられることとなった。その後、「大人になる前に子どもがどういう存在であるか」といったコメニウスをはじめとする先人達の議論には見られなかった哲学的思想を含めた幼児教育論がルソーによって論じられるようになった。そのような中、ペスタロッチはルソーの教育思想に大きな影響を受け、教育によって貧民を救済することを考え、その生涯を捧げたのである。そして、その精神は弟子達に受け継がれ、ペスタロッチの下で学んだフレーベルは「子どもは生まれたときから創造的である」と考え、幼児の心の中にある神性をどのようにして伸長していくかについて腐心し、小学校就学前の子ども達の為の教育に一生を捧げ、その功績が現在の幼稚園へと繋がっているのである。その後、時代の流れと共に現在にも残る様々な幼児教育が誕生した。集中作業による指導法を唱えたモンテッソーリは、モンテッソーリ・メソッドの創始者であり、また、モンテッソーリ教具とよばれる一連の体系的な教具の発案者でもある。モンテッソーリ・メソッドは日本のいくつかの保育施設等でも現在取り入れられており、その教育実践が行われる施設は「子どもの家」、または、モンテッソーリ・スクールと呼ばれている。その他にも、フレーベルを深く研究した倉橋惣三は誘導保育論を唱え、その保育思想はフレーベルの保育思想を形式だけでなく精神そのものを大切にすることであった。そして、倉橋惣三の保育思想は大正時代の初期から第二次世界大戦後までの長い間、日本の幼児教育界において指導的役割を果たし続け、その理論・実践は当時の日本の幼児教育に極めて大きな影響を与えることとなった。

現代の幼児教育には様々な教育法が用いられている。有名なものとしては、子どもの自発性・内発性を重視する「モンテッソーリ教育」、想像力で遊ぶ事を重視する「シュタイナー教育」等である。また、最近注目されている教育法として、横峯吉文氏が鹿児島で行っている「ヨコミネ式教育」がある。ヨコミネ式教育は、「子どもは競争が大好きである」「子どもはマネしたがりでである」「子どもはちょっとだけ難しいことをやりたがる」「子どもは認められたがりである」という4つのポイントに集約されている。これらのポイントに沿って子ども達それぞれに合ったトレーニングを行い、年長児の50m走の平均タイムが全国の小学2年生の平均タイムと同程度であったり、跳び箱10段が跳べたりという体力面での成果、および、全員が小学校低学年の本を読めるようになったり、全員が絶対音感を身に付ける等の知的な面における発達の成果が報告されている。

## 2 章 乳幼児教育の利点

最近、乳幼児教育の中で早期教育が注目を集めている。その背景として、脳が柔軟で高い吸収能力や順応能力が高い幼い間に教育を開始する事で、脳の活性化を高め、優秀な人間に育てたいという大人の期待がある。そこで、この章では実際に早期教育にはどのような利点があるのかを述べていくことにする。

### 2.1 節 早期教育の利点

早期教育には多くの利点がある。例えば、音楽には絶対音感というものがあり、小学校から音楽を始めても絶対音感は身に付きにくいと言われている。また、英語のヒヤリングも大人になってから習得するのは難しいと言われている。これら二つに共通することは音の周波数である。具体的には、英語の周波数と日本語の周波数を比較するとかなりの差があり、大人になるに連れて日本語の低い周波数に慣れる為、英語の高い周波数を聞き取ることが難しくなってくる。しかし、幼い頃は高い周波数も聞き取ることができる為、この時期から英語の高い周波数を聞き続けることで、簡単に英語を習得することができるのである。この他にも、早期教育は脳の発達においても大きな影響を与えることが最近の研究で明らかとなっている。脳にはシナプスという記憶や学習に重要な役割を持つ神経回路の結合部があり、シナプスが多いほど記憶や学習に良い影響があるが、シナプスが人生の中でも最も急激に増える時期が3歳までの間だということが明らかとなった。そのため、この時期にシナプスを増やすような刺激を赤ちゃんに与えることで、脳の様々な回路がつながり、天才児を造ることも不可能ではないと考えられている。このように幼い時期にしか身につけられない能力を習得することができるという点が早期教育のメリットなのである。

ここで、ヨコミネ式教育法における「読み」「書き」「音楽」の利点について述べていく。ヨコミネ式教育法を実施している幼稚園では3歳の夏にはひらがな・カタカナの拾い読みが出来るようになり、拾い読みが出来るようになると子ども達は自ら進んで本を読むようになり、6歳の冬には1500冊～2000冊もの本を読破するのである。また、ヨコミネ式教育法ではひらがな・カタカナは独自の「ヨコミネ式95音」というものを使って覚えている。子どもに文字を教える時、五十音の最初である「あ」から教えることは常であるが、「あ」は曲線が多く、バランスや書き順が複雑である為、初めて文字を書く子どもには難しい。そこで、画数が少なく子どもが簡単に書ける文字から順に95音並べたのが「ヨコミネ式95音」である。また、耳の良い乳幼児から音楽に親しむことで、3歳の夏にはピアノを始め、5歳までには60曲ものレパートリーを持つようになる。そして、ピアノ以外にも鉄琴、木琴、キーボード、ドラム等を演奏することが出来るのである。以下にヨコミネ式95音一覧表を示している。

【ヨコミネ式95音 一覧表】

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
一	丨	十	ニ	エ	ノ	イ	テ	ナ	ハ	フ	ラ	ヲ	リ	サ	ヘ	ト	コ	ヨ	レ	ル	ホ	オ	カ	メ
26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
ワ	ウ	ス	ユ	ロ	ミ	ク	タ	ヌ	マ	ア	ヤ	セ	ヒ	モ	ケ	ム	キ	チ	ネ	ソ	ン	シ	ツ	ヘ
51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75
り	く	つ	し	い	こ	に	た	け	も	う	て	と	ち	ろ	る	ら	か	の	ひ	せ	さ	き	よ	ま
76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95					
は	ほ	わ	れ	ね	め	ぬ	す	み	や	そ	な	お	ゆ	を	ふ	え	ん	あ	む					

次に、モンテッソーリ教育法とは子どもの自発性を重んじる教育法である。モンテッソーリ教育法では、子どもに自由な環境を提供して、子どもの活動の基礎となる知的好奇心が自発的に現れるよう工夫されており、その自由な環境の中で子どもは自分のペースで興味や関心のある活動に満足するまで取り組み、達成感や充実感を得ると共に物事を考え、判断する力を身につけている。また、モンテッソーリ教育の特徴は感覚教育にある。感覚の敏感期にある3歳から6歳の子どもに各感覚を個別に取り上げ訓練する為に創られた感覚教具を用いることで、抽象概念がより容易く、また、正確に捉えられるようになると共に各感覚の洗練や秩序感の形成、精神の集中を狙っている。

最後に、シュタイナー教育は人間の成長について深い洞察に満ちた思想であり、哲学者でもあるルドルフ・シュタイナーの人間観に基づいた独特な教育である。その教育観は成長の節目を7年ごとに捉え、0歳から7歳までの第一7年期では「意識」の形成、8歳から14歳までの第二7年期では「感情」の形成、15歳から21歳までの第三7年期では「思考力」の形成に重点を置いている。具体的に、第一7年期の課題は体を作ることである。幼児期に丈夫な体を作ること、それが将来の思考力や行動力を生み出す源になると考えている。第二7年期では芸術的刺激を与えることで生き生きとした感情を育み、「世界は美しい」と感じられる教育を目指している。また、第三7年期では表象活動の活発化が課題となる。明晰な表象活動により「世界は真実に満ちている」ことをはっきり理解する教育を目指している。そして、シュタイナー教育を終えて社会に出た時、自分自身で考え、行動できる人間の育成を最終的な目的としているのである。実際にドイツでは公立学校と比較してシュタイナー学校の卒業生の大学進学率が高い傾向にある。

## 2.2 節 乳幼児教育と出生率

現在、子どもの教育において「子ども手当」が注目を集めている。これは、家庭の子育てを支援する為に予算を増やして、子育てを個人の問題ではなく社会全体の問題として考えて支えていくことで「子どもを安心して産み育てることができる社会の構築」を目指しているのである。

このような施策の背景として、近年、幼稚園や保育園により良い教育が求められる。具体的に出生率が国内1位の沖縄県に目を向けてみると、沖縄県那覇市の「那覇市幼児教育振興アクションプログラム」が策定され、このプログラムでは幼稚園・保育園の質の向上を目指しつつ、家庭や地域社会の教育力の再生・向上にも重点を置こうとしている。そして、このプログラムの目的として、家庭は愛情やしつけなどを通して幼児の成長のもっとも基礎となる心身の基盤を形成する場であり、地域社会は様々な人々との交流や身近な自然との触れ合いを通して豊かな体験を重ねる場と考え、そして、幼稚園や保育園等は家庭や地域との連携を保ちながら家庭教育の結果としての子どもの成長を受け、そこで行われる集団活動や遊びを通して、社会、文化、自然に触れ、幼児期の豊かな感性に出会う場と考えられているのである。

このように、教育の場を幼稚園・保育園だけに留めるのではなく、家庭や地域社会にも範囲を拡げ、親としての責任、役割を明確にすると共に地域の多様な人材との積極的な連携を進めなければならないと考えられている。子育てや教育を幼稚園・保育園や家庭内だけでなく地域社会の問題として積極的に取り組もうとする姿勢が子育てをしやすい環境を造り、出生率が国内1位という結果に繋がっているのである。

## 3 章 乳幼児教育の問題点

前章では早期教育の利点について述べたが、それと同様に早期教育には様々な問題点があることも指摘されている。それは、優秀な人間に成長してほしいという親の期待に対して、子どもにはそれぞれ個性があることや親の希望と子どもの希望が一致しないこと等、必ずしも早期教育が

子どもにとって最善の利益とはならないということである。そこで、この章では早期教育が持つ問題点を様々な観点から考察していくことにする。

### 3.1 節 早期教育への批判

早期教育は、乳児・幼児・小学校低学年等の子どもには無駄、または、弊害があるという説もある。これらの主な批判意見として、①有効性に対する科学的な観点からの批判、②子どもへの悪影響を危惧する立場からの批判、③親子関係への悪影響を危惧する立場からの批判、④社会への悪影響を危惧する立場からの批判の4種の主張に分けられる。

①の具体的な例として、早期教育論者は大脳生理学的に才能逡減の法則や右脳・左脳論等を捉えているが、その大脳生理学は早期教育論者にとって都合の良いように解釈されているものであり、必ずしも科学的な根拠のあるものではないのである。また、3歳までに急激に脳の重さが重くなるということから3歳までに教育を開始し、シナプスを増やさなければ手遅れになると言われることがあるが、3歳までに脳が重くなるということは「構造」が出来上がるだけであり、必ずしもその「機能」が発達する訳ではない。つまり、その考え方は3歳までの家庭環境が人格を左右するという、いわゆる「3歳児神話」の一種でしかないのである。次に②の批判の例として、十分な認識力や判断力等が育つ以前に文字や数だけを取り出して概念的な認識の獲得をさせようという知育に偏る教育は「総合的な学習」に反するものであるという主張や早期教育で年齢相当の学習内容を終えてしまっている子どもは学校の授業が退屈で浮きこぼれ状態になってしまうのではないかと等々の主張がある。また、子どもにとって本来の遊びがなくなることも懸念されている。そして、③の批判については、子どもが学ぶことに対して大人の評価や親の価値観が侵入してくることが問題であるとされている。子どもに無言のプレッシャーを与えていないか、過度の期待は子どものストレスを増大させるのではないかと、親は自分の不安を紛らわす為に親自身が達成できなかったことを子どもに実行させようとしているのではないかと、等々の主張がある。最後に④の批判については、もし今後早期教育が効果的であると科学的に証明された場合、現在の学校制度の枠内では経済的に豊かな一部の恵まれた子どもだけが幼少、あるいは胎児の時から早期教育を受けることができるという経済格差に起因する学力格差を生む可能性があるという主張が主である。

これらのように早期教育には悪影響が懸念される部分もある為、現在では早期教育に対し反対意見を唱える人も多いのである。

### 3.2 節 早期教育の具体的な問題

早期教育にはいくつかの問題があることも指摘されている。そこで、ここでは具体的にヨコミネ式教育法の体操に注目して考えていくことにする。ヨコミネ式教育法では全ての子どもが逆立ちや跳び箱等、あらゆる運動ができるようになる事を目的として活動を行っているが、子どもにも個性があり、中にはマイペースな子どもや運動が苦手な子どももいる。そのような個性を無視して、「できるようになる事」だけに固執しまうと、反って運動に対して苦手意識を持つ子どもや運動嫌いになってしまう子どもが少なからず出てくる。また、ヨコミネ式教育法では運動において、勝つ事・できるようになる事に重点を置いており、競争心を教え込む為、中には運動が苦手な子を馬鹿にする子がいたり、いたわる・助け合う・思いやるといった道徳性を学ぶ機会が少なかったりと様々な問題点が挙げられる。勿論、幼いころから多くの事を身に付けるのは悪い事ではないが、ある部分にだけ力を入れ過ぎてしまうと別の部分で何らかの問題が生じてしまうことも事実であり、忘れてはならないことである。

次に、子どもの自発性を重んじるモンテッソーリ教育法について考えていくことにする。モンテッソーリ教育は前章でも述べたように、子どもの活動の基礎となる知的好奇心が自発的に現れ

るよう子どもに自由な環境を提供して、その自由な環境の中で子どもは自分のペースで興味や関心のある活動に満足するまで取り組むという教育法であり、この教育法で子ども達は個々の能力を高めることが出来るのである。しかし、常に自分のペースで黙々と作業を行ってきた子ども達は、成長して社会に出たときに欠かすことのできない協調性を学ぶことは出来ていない。すなわち、モンテッソーリ教育を受けている最中は良いかもしれないが、子ども達が成長して様々な環境の中で生活していくことを考えると、集団の中で協調性を学ぶことの方が大切なのである。

### 3.3 節 韓国の英語教育

近年、韓国政府は英語教育を強化するという方針を公式に発表して、1997年には小学校での英語教育を義務付けた。それに伴い、現在では未就学児への英語教育がほぼ全ての幼稚園や保育園でも行われている状況であり、中には英語幼稚園というものが人気を集めている。英語幼稚園とは、ネイティブスピーカーの教諭を中心として園内での会話や授業を全て英語で行っている幼稚園のことである。その費用は年間 1800 万ウォン（日本円に換算して約 128 万円）に上ると言われており、韓国の私立大学の平均的な年間授業料と比べても約 2 倍の金額となっている。韓国の平均年収は 3500～4000 万ウォン（250～285 万円）であることから分かるように、韓国では教育費の占める割合が非常に高く、経済的な格差が教育の格差を生み出しており、更には、韓国の少子化へと繋がる可能性が懸念されているのである。

韓国の英語教育を象徴しているのが「キログアッパ」である。「キログ」とは渡り鳥の雁、「アッパ」とは父親のことで、早期留学で海外に滞在する家族の為に韓国に残り単身で働く父親を指している。親は少々家計が苦しくても早期留学をすることによって子どもの英語の習得を期待しているが、実際に早期留学を経験した子どもの中には母国語の低下や長い海外生活でのストレスによって精神的に不安定になるケースもある。また、家族が離れて生活していることや経済的な理由から家庭が崩壊して、それが子どもにとって大きな精神的負担となることがある。

以上のことから、韓国政府は教育にも競争と市場論理を適用して、国際社会に通用する人材を育成するという教育方針を掲げているが、急速に英語教育を進めたことにより、家庭や子どもへの負担が大きくなっていることも事実である。そして、あくまで優先すべきなのは母国語と母国文化の教育であり、英語教育はその延長線上に考えなければならないのではないだろうか。

## まとめ

これまで述べてきたように、乳幼児教育・早期教育は現代の少子化や女性の社会進出等の現象により大変注目され、日本だけでなく世界においても乳・幼児期からの算数教育、言語教育、音楽教育等、様々な教育が行われている。そして、絶対音感の習得やヒヤリング等の幼児期にしか身に付けられない能力を体得する等、多くの成果が報告されており、子どもの成長において利点となる部分が多くあることも事実である。しかしながら、子どもや社会に悪影響を与えると危惧する意見が多いことも事実であり、社会や大人が子どもの最善の利益を考慮することは言うまでもないが、それを考慮するのは誰であるのか、それが本当に子どもにとっての最善であるのか、それを判断することは難しいことである。従って、子どもの最善の利益の名の下に押しつけの教育とならない為にも十分な注意が必要であり、悪影響が懸念されているものは思い切って取り止める等、また、現在は見つかっていない悪影響に対する改善策について研究していく等、未来を担う子ども達の為に大人や社会が真剣に考え続けることが重要なのである。

## おわりに

この論文は中村学園大学短期大学部 幼児保育学科 橋本弘治研究室において2008年から2011年に作成した卒業研究論文です。当研究室では卒業研究論文集を「幼児保育」と中村学園の学園祖 中村ハル先生の遺訓「努力の上に花が咲く」を組み合わせ「中村学園大学短期大学部「幼花」論文集」（以下、「幼花」論文集と記す。）と名付けております。但し、これは中村学園大学短期大学部としての正規の発行物ではありません。「幼花」論文集は当研究室にて作成した卒業研究論文の論文集です。

卒業研究論文は2008年より当研究室のホームページにて概要のみを公開しておりました。また、「幼花」論文集は卒業生への配布を目的として、基本的には非公開を前提として、パスワード保護により当研究室のホームページよりリンクしておりました。但し、個別にお問い合わせを頂いた教育・研究機関の関係者にはご理解頂いた上でお渡ししております。

この度、2018年8月現在においてパスワード保護が何らかの理由で解除され、「幼花」論文集が一般公開されている事実を確認いたしました。この事実に関しまして、ホームページを公開する者として管理不行き届きがありましたことを心よりお詫び申し上げます。

これまでリンク元である当研究室のホームページより論文へアクセスされた方はご理解された上でご覧いただいていると思っておりますが、それ以外の経路により直接論文へアクセスされた方には誤解を生じる論文集の名称であることから、この度、この文面を「幼花」論文集のすべてに追記することにいたしました。また、これまで卒業生への配布と総合演習（卒業研究）発表会での使用を前提としておりましたので、著作権表示として「中村学園大学短期大学部」と表記しておりましたが、「お問い合わせ先」と変更しております。尚、「幼花」論文集の詳細についてはリンク元である当研究室のホームページをご覧ください。

<http://www.nakamura-u.ac.jp/~hashimot/members/members.html>

「幼花」論文集は保育・幼児教育を中心として、保育者を目指す学生が真摯に取り組んだ卒業研究の成果集です。当研究室としましては、この「幼花」論文集が教育・研究をはじめとして、子ども達を取り巻く環境改善の一助となることを希望しております。

上記をご理解の上、本文をご覧くださいますようお願いいたします。

2018年8月8日  
中村学園大学短期大学部  
幼児保育学科 橋本弘治